

編集後記

編集委員として最初の委員会に参加した時、提出された原稿はすべて「組版システム」、「高品位文書処理システム」などと呼ばれている $\text{T}_\text{E}\text{X}$ のファイルに変換されその後の処理を経て印刷所へ回されると聞き、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ へのこだわりを印象深くうかがいました。今でこそ使い勝手および仕上がりの良くなった WYSIWYG (What You See Is What You Get) 志向のワープロソフトなどを中心としたコンピュータシステムが多様に普及しており、個人のレベルでは原稿を作る時 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ のシステムを意識して書くという発想は一般的には稀な印象を持ちますが、90年代半ば頃私は日本語、英語の抄録、特にポスタによる学会発表のための作品? など盛んに $\text{T}_\text{E}\text{X}$ システムを使って仕上げたものでした。 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ はスタンフォード大学の Donald E. Knuth 氏が開発した文書作成用ソフトウェアで、70年代の中ごろ氏が “The Art of Computer Programming” を当時のコンピュータシステムを利用して刊行しようとしたところが出来ばえが惨めなもので、立場上、面子をかけて美しいレイアウトの出来るソフトウェアの開発にとりかかったと聞いています。このような Knuth 氏の意気込みを感じ、またそれだけのことはあって、私が $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を使い始めた当時存在していた一般のワープロシステムなどに比べると、微妙なスペースの間合いや文字の並び方、配置など思うように美しく取れるなど、いろいろな面で立ち入って使えば使うほど仕上がりの結果が好みに沿って良くなっていき、印刷した仕上がり結果を眺めては密かに自己満足をしたものでした。結果を予測しながら文書処理用のコマンドを埋め込んでフォマットを整えていき、プレビューを動かしては結果を確認するというステップは、コンピュータプログラムを作成していく時の楽しさそのものであることもついついのめりこんだ要因の一つであったような気が致します。

今でも物理学関係の学会などでは数式の組版が美しく容易にできることもあり論文などを $\text{T}_\text{E}\text{X}$ にのっとして記述して投稿する事がよく行われていると聞きましたが、これは学会が $\text{T}_\text{E}\text{X}$ フォマットを提供し、使う側からすれば必要な文章に集中してただ書きさえすれば自動的に学会の統一された書式で結果が得られるので、 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ に対する知識が必ずしも深くなくても便利に使えるとのことでした。川崎医療福祉学会誌の場合は投稿の段階から専用のフォマットを提供するといったシステムが整えば、各論文の書式の調整等の効率が更に改善されるような余地はあるのでしょうか。

編集委員会に参加してなつかしい想いをさせて頂きました。

編集委員 成田和彦

川崎医療福祉学会誌

平成21年1月25日発行

発行者 岡田喜篤
発行所 川崎医療福祉学会
〒701-0193 倉敷市松島288
印刷者 西尾源治郎
印刷所 西尾総合印刷株式会社 横井支店
〒701-1145 岡山市横井上90
連絡先 川崎医療福祉大学 中央教員秘書室
〒701-0193 倉敷市松島288
TEL 086-462-1111 内線54095
086-464-1010 (直通)
FAX 086-463-3508